

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

朝起きて新聞読むたび目をこする十九世紀の記事が載っている 仙台市 多田 直文

△評▽他国の領土への侵略や非人道的な攻撃の記事を読むと、今が19世紀に思えるというのだ。痛烈な批判と深い嘆き。

戦争のニュース聴くたび古老の言葉少なく目伏せる春夜 須崎市 野中 泰佑

△評▽介護施設で働く作者の歌。戦時体験者の不安を下の句がしっかり伝える。

あんなにも勇壮だった黒牛がこんなペラペラスライスになる 池田市 黒木 淳子

引き出しにほのかに残る冬の香を掴んだままに眠る手袋 宮崎 門田 藍子

自己啓発本を読むのが趣味だからダメな自分のままであります 金沢市 竹内 一二

山深き出で湯の岩は声もなく人の顔して僕を見ている 生駒市 宮田 修

長風呂のお供はアイスと炭酸とスマホとスルメ 持ちこむ娘 豊後大野市 菜 瑞 菜

逆剃りの切れ端を爪の白色の上に置いたらおんなじ色だ 東京 遠野 鈴

住んでいるよりかは寝ているような呼吸のくぐもる実家で眠る 川崎市 二宮 珊瑚

オンラインで久々に会いし父なれど居眠りしつつ三日後に逝きぬ 松戸市 加賀 昭人

米川千嘉子 選

孫五人隣家の集ひは愛しきやし泣きぬし赤子に言葉出始め 坂戸市 納谷香代子

△評▽にぎやか声の一つが泣き声から言葉になったのを聞き止める心が柔らかい。作者の側の静けさや孤独も見えるか。

またひとつ「米隠し」なる流行語米とかかわり無き人の術 鶴岡市 左 文字

△評▽消費者はもう農家の思いや苦勞と関わりなく起きる騒動がやりきれない。

薄れゆく私性は職場にもありて聞いてはならぬ悲しみのわけ 東京 富見井高志

ウクライナの少女が銃を習ふ纏るわれは言はれき竹槍で殺せと 京丹後市 山副美佐子

英文のような伝票カフエに射す光と遊ぶ君の睫毛よ 名古屋市 外山 雪

八十路にて手術選択する理由「妻がどうにも心配だから」 市原市 宮 弘子

陥没事故起きて社会が動き出す犠牲者あはれ救ひたまへ神 江別市 海老澤 基

ロシア民謡カチューシャ・トロイカいい歌をいっばい持っているのに何故だ 行田市 永沼規美雄

球審は機械に代われと奇妙なるジャッジに立いた子は思ったよ 静岡市 柴田 和彦

やさしさを思い出せなくなりそうでアンモナイトのかたちで眠る 堺市 平山 詩乃

加藤 治郎 選

なぜなのかわからないけど君のこと考えるとき眼鏡をはずす 垂水市 岩元 秀人

△評▽恋の歌だろう。思うのではない。考えるというところにクールな感じがする。結句のスケッチにも知的な雰囲気がある。

抱かれた記憶のように流れゆく車窓の外のたぐさんの窓 東京 畑 えな

△評▽流れてゆくと感じるとき愛の記憶は美しい。窓が光る。現在と過去が交差する。

人間に生まれた俺もこの歳で機械のようなそれもボンコツ 大阪市 吉田 昌之

入れ歯取りミッフィーみたいな口をしたばあちゃん言葉飲み込んで 広島市 堀 眞希

雨の夜はとても静かだ ずっと前の冬に遊びで君を泣かせた 名古屋市 森本 有

教えてよびんびんころりの逝き方をばばふみふみ生成AI 東京 青木 公正

ものすごい速さで近づく水面が光に満ちて釣られる魚 神戸市 中林 照明

カラヤンを聴きつつ眠る 月にもうバツハの音がたどる着くころ 雲南市 熱田 一俊

あしひきの山の稜線二つこぶ故郷への道はからの待つ 尾張旭市 小野 薫

川べりで自由にカメラふりまわす手が冷えて手がすぐ切れてる 岡山市 松井 度

水原 紫苑 選

まずはじめ、光があつてつぎに地が、と画用紙いっぱい描く幼子 横浜市 砂月 七

△評▽神の創造そのもののようなお絵かき風景である。あるいは神も子どものままなのだろうか。

引力はひとそれぞれに 惑星のように回ってゆく美術館 京都市 よだ か

△評▽ひとそれぞれの惑星が美術館の宇宙で光る、こは手宙だ。

「大丈夫、こわがらなくていいから」ときみは花壇に水をやってた 神戸市 入間しゅか

駄菓子屋のあった場所から伸びている生命線が中途で切れる 札幌市 橘 晃弘

鍵盤は鳴らした順に捨ててゆく「夜のガスパール」が弾けるまで 雲南市 熱田 俊月

幽霊とそう呼ぶ以外ないものがぐるぐる光ってだ立っている夕映え 宮古島市 塩見 伴

雑草の羽を眺めるポケットの中の指輪が傷だらけでも 岡山市 松井 度

△うつくしい暴力△なんて認めないあなたの言葉は沛雨のように 取手市 奥山いずみ

配達員は闇を怖れるポケットのなかのジッポは桐に鳳凰 浜松市 尾内甲太郎

シースルーエレベーターが音もなく月に向かつて昇る街角 倉敷市 中路 修平

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます